

小中一貫校・非一貫校における子どもの適応・発達 (18)

—共同体感覚に着目して—

○高坂康雅 (和光大学)
岡田有司 (東京都立大学)

都筑 学 (中央大学)
金子泰之 (静岡大学)

キーワード：小中一貫校，共同体感覚

問題と目的

施設一体型小中一貫校は非一貫校と異なり，基本的に小学校段階から中学校段階にかけて対人関係が継続することになる。このような学校形態の違いによって，子どもの精神的健康や学校適応に差がみられることが示されてきた。

そこで，本研究では 2018 年度から開始した縦断調査の初年度のデータにもとづき，精神的健康や学校適応の総合的な指標である共同体感覚に関して小中一貫校（施設一体型）と非一貫校を比較することを目的とする。

方 法

調査対象者 施設一体型小中一貫校 9 校 1,308 人，非一貫小学校 17 校 1,469 人，中学校 7 校 2,370 人

調査内容 小学生版共同体感覚尺度：高坂(2014)の小学生版共同体感覚尺度を使用した。この尺度は「貢献感」(4 項目)，「所属感・信頼感」(5 項目)，「自己受容」(4 項目)の 3 下位尺度で構成されている。

結果と考察

小学生版共同体感覚尺度 3 下位尺度得点について，学校形態(2)×学年(6)の 2 要因の分散分析をおこなった。全ての下位尺度について交互作用が認められたため，単純主効果検定を行った。

「貢献感」については，4 年では一貫校の方が得点は高いが，7 年では非一貫校の得点の方が高かった (Figure 1)。また，一貫校では，4 年が 5 年，6 年，7 年，9 年よりも高く，9 年は 7 年よりも高かった。非一貫校では，4 年，5 年，7 年，9 年が 8 年よりも高かった。「所属感・信頼感」では，5 年と 9 年で一貫校よりも非一貫校の方が高かった (Figure 2)。また，一貫校では 4 年が 8 年よりも高く，非一貫校では 4 年，5 年，6 年，9 年が 8 年よりも高かった。「自己受容」では，4 年では一貫校の方が非一貫校の高く，5 年では非一貫校の方が一貫校よりも高かった (Figure 3)。また，一貫校では 4 年が他の学年よりも高く，5 年が 8 年よりも高かった。非一貫校では，4 年・5 年が他の 4 学年よりも高く，6 年は 7 年・8 年よりも高かった。さらに 9 年は 8 年よりも高かった。

以上から，共同体感覚は一貫校，非一貫校にかかわらず，4 年を最高として，学年があがるごとに低下していき，7 年または 8 年を底として，9 年で上昇する傾向がみられた。しかし，非一貫校で

はその低下の程度が緩やかであるのに対して，一貫校では 4 年から急激に低下することが示された。

今後は，このような変化の傾向の差異の背景を明らかにしていく必要がある。

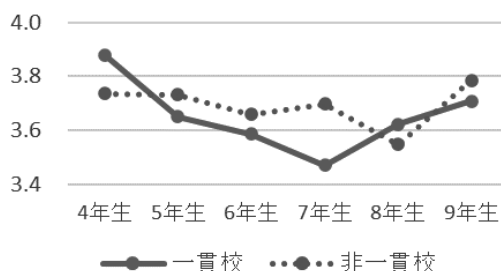


Figure 1 「貢献感」得点の平均値

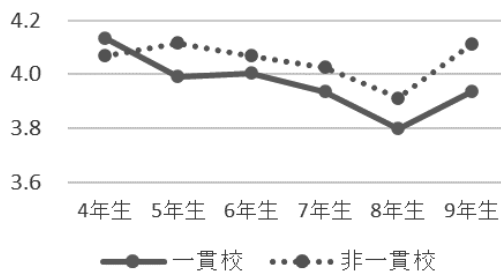


Figure 2 「所属感・信頼感」得点の平均値

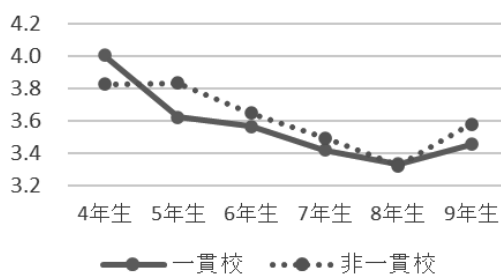


Figure 3 「自己受容」得点の平均値

付 記

本研究は，科研費（基盤研究（B）課題番号 18H00981：代表・梅原利夫）の助成を受けた。